

渋江遺跡検出の墓域について

—主に近代墓に関する報告—

押切 智紀 多田 和弘 西田 明日香

1 はじめに

渋江遺跡の発掘調査は、これまでに平成11・12年度(第1～3次)の3回(内第1次は予備調査)にわたって実施されており、竪穴住居跡、土坑、溝跡などの多くの遺構が検出されており、古墳時代の集落跡が確認された。そして平成13年4月16日から9月14日まで行われた第4次調査においては、南小泉式期の土師器が大量に出土する古墳時代中期の大規模な集落跡が確認された。だが調査の際に古墳時代の遺構の上層から、近世・近代にかけて埋葬された墓坑が170基ほど検出された。これらの詳しい情報については『渋江遺跡第4次発掘調査報告書』(押切2002)で述べられている。なお、副葬品としては六道銭、陶磁器、位牌¹⁾などが挙げられる。しかし、前掲報告書において特に近代の墓坑については十分に述べるができなかった。よって、これら述べられなかった墓坑(ただし、SH103などは掲載済)について、この稿で述べたいと思う。

2 遺跡の位置とその周辺

渋江遺跡は、山形市北西部にある大字渋江字田中・寺小路に位置している。付近には南側に白川(馬見ヶ崎川)が流れ、北側に三条ノ目や灰塚などの集落が広がっている。また調査区の南隣には曹洞宗の真福寺があり、調査区内から近世・近代の墓坑が大量に検出された。

本遺跡は白川右岸の自然堤防上に位置しており、標高97mを測る。この地域は立谷川扇状地の扇端部にあたり、豊富な地下水を利用して山形盆地内でも早くから集落が形成されたものと思われる。

3 木棺構造について

渋江遺跡から出土した木棺の構造は大きく3種類に分けられる(第2図参照)。

①底部に横木を渡して木棺を固定し、その上に筵が敷かれている箱形のもの(箱形A)

②板に釘を打ちつけて固定し、板材や角材で補強されている箱形のもの(箱形B)

③円筒形の桶状の木棺で、籬で固定されているもの(早桶)

このほかに箱形木棺の形状は残しているものの腐食のために木棺がほとんど残存しておらず、形状の確認できないものが出土したが、これについては便宜上、箱形Cとした。また、木棺を使用せずに直接遺体や遺灰等を土坑に埋葬した直葬の墓坑もあった。ここでは墓坑の構造として特徴のある木棺墓について述べることにする。

木棺の形状や大きさについては一定しておらず、特に箱形木棺では、立方体箱形木棺と直方体箱形木棺に分けることができた。箱形Aは釘がほとんど使われておらず、横木を側板につけたホゾ穴に固定した簡素な造りである。籬のほとんどは炭化や腐食などで、その形状を留めていないのがほとんどである。横木の本数は木棺の大きさにより2～4本と一定してしない。これに対して、箱形Bは小さな板を組み合わせて作られており、釘で打ちつけて固定されていた。また、角材や板材を利用して嚴重に補強されている。早桶の埋葬状態は、一部立てた状態で埋葬されたものもあったが、ほとんどは上部を北側に向けて倒された状態で埋葬されていた。このことは頭部を北側に向けることで、北枕の状態に埋葬していることを示したと考えられる。籬は短い材を編んで作られたものがほとんどである。蓋板も小さな板を組み合わせて構成したものが多くことから、近くにあった材料で短時間の内に作られていたことが想像できる。

本遺跡の木棺の使用年代は、副葬品から箱形Aの登場が18世紀後半以降と最も早く、その後19世紀に入ってから箱形Bや早桶が使用されるようになり、3種類同時に推移していったようである²⁾。

4 近代墓について

墓坑は、A～C区から26基、D区から143基の合計169基が確認されている。また墓坑の一部はX軸16～21、Y軸23～24にかけて東西軸上に並んで配置されており、北側に広がって平行に移動していると考えられる。また葬法は一部土葬の墓もあったが、そのほとんどが火葬であり、焼け残った人骨がそのまま出土した墓坑もあった。その中で本稿の中心である近代墓は20数基を数える。

以下、検出された主な近代墓について説明する。

S H 103(第3図) B区東側18－23 Gで検出された箱形Cである。木棺は無かったものの、長軸70 cm、短軸52 cmで炭化物が残存しており、木棺規模が同程度あったことが推定される。副葬品は墓坑の南西部から、外面に笹文の描かれた平清水焼の小碗(1)と、一屋山水・船文の描かれた会津本郷焼の小碗(2)が出土している。副葬品の出土状況から墓坑の埋葬年代は19世紀後半以降と考えられる。

S H 618(第3図) B区西側20－14 Gで検出され、長軸87 cm、短軸75 cmの掘り方をもつ直葬である。副葬品は陶器の大碗(3)と六道銭である。六道銭は古寛永(4)、新寛永(5・6)、不明銭が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

S H 662(第3図) D区北側20－14 Gで検出され、長軸54 cm、短軸42 cmの掘り方をもつ直葬である。副葬品は染付破片(7)と六道銭である。六道銭は古寛永(8)、新寛永(9～12)が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の年代は近代と考えられる。

S H 732(第3図) D区北側20－11 Gで検出され、長軸70 cm、短軸62 cmの掘り方をもつ直葬である(箱形Cの可能性あり)。副葬品は大堀相馬焼の湯呑(13)と六道銭である。湯呑(13)は、外面と高台が指押し整形されており、見込みに走馬文が描かれている。また、高台裏には「相馬」と陰刻されていた。六道銭は新寛永5枚(14～18)が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

S H 762(第3図) D区北側19－16 Gで検出された箱形Bである。木棺規模は長軸75 cm、短軸35 cmで、

側板と底板が若干残っているほかは腐食しており、残存状態はあまり良好ではない。副葬品は平清水焼(?)の小碗(19)、産地不明の急須(20)、硯(21)、キセル(22)、六道銭が出土している。小碗(19)は、表面に竹が描かれ、「月分立 清影 風来弄 好音 文竹斎」と漢詩が草書で書かれている。急須(20)は表面に赤錆が付着しているために、蓋と身が癒着していた。また側面に茸の装飾があり、高台裏には「白水」・「有隣」と陰刻されている。硯(21)は関西の高嶋硯で、裏面に「加藤勇作」と線刻されていた。このことから故人の愛用品が副葬品として埋葬されたことが窺える。キセル(22)は銅製と考えられ、表面に銀メッキが施されている。また縦に接着痕が残っていることから、銅板を棒に巻きつけて整形したものと考えられる。六道銭は、古寛永1枚(23)、新寛永2枚(24・25)である。副葬品の出土年代から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

S H 720・766(第4図) 両方ともD区北側19－17 Gで検出された箱形Cで、S H 766がS H 720を切っている。S H 720は木棺が残存しておらず、短軸45 cmの木棺を据え置いた痕が残存するのみである。だが、墓坑内から鉄製の頭巻丸釘(31・32)が出土していることから、箱形Bの可能性もある。他にも鉄釘は、S H 858から断面が角状の折釘(33)が出土している。S H 766は木棺が残存しておらず、長軸45 cm、短軸40 cmの木棺を据え置いた痕が残っている。副葬品は、S H 720から表面に縦縞文のある染付の破片(26)と、白く色付けされたガラス製の数珠玉(27)が出土しており、同様の数珠玉が同じ墓坑内から3個出土している。また、S H 720とS H 766の境界付近から六道銭の新寛永3枚(28～30)が出土している。副葬品の出土状況から、これらの墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

S H 842(第4図) D区南側21－12 Gから出土している箱形Bである。規模は長軸78 cm、短軸43 cmである。木棺内部には、炭化物が、5～10 cmの厚さで堆積していたが、その中に焼け残った人骨の一部が含まれていることから、火葬した際の遺灰であると考えられる。取り除いた木棺の底部から布の破片(34)が出土している。布は中央に菱形文が描かれ、周囲に渦巻文があしらわれているが、残存状態は非常に悪い。

S H 864(第4図) D区南側22－9 Gから出土してい

る箱形Bである。規模は長軸76cm、短軸44cmで、木棺の底には厚さ3cmの炭化物が残存している。副葬品は、透明なガラス製の数珠玉(35)と六道銭が出土している。同色同形状の数珠玉は同じ墓坑内からほかに49個出土している。しかし、中には少し直径の大きい数珠玉も含まれており、数珠が2本あった可能性もある。六道銭は古寛永5枚(36~39・41)、文銭1枚(40)、新寛永1枚(42)が出土している。副葬品の出土状況から、墓坑の埋葬年代は近代と考えられる。

なお〈43〉~〈47〉は墓域周辺の遺構外から集中して出土したものである。〈43〉~〈45〉については葬儀中に使用され廃棄されたと思われる。〈46〉は漆継ぎが行われており日常生活で活用されていたと想定できる。

5 まとめ

今回の渋江遺跡の調査でまとまって近世・近代の墓坑群が検出され、木棺構造や副葬品の変遷などが解明されたことは意義深い。近年、近世墓の発掘例が増加しており、平成13年度には、本県周辺で青森県の畑内遺跡、

岩手県の胆沢城跡第82次、秋田県の柴内館跡の発掘調査が行われた³⁾。これらは木棺の形状が箱形木棺や早桶と非常に似ているものの、その葬法はすべて土葬である。本遺跡はほとんど火葬で埋葬されており、埋葬時期や地域性に違いがあると考えられる。

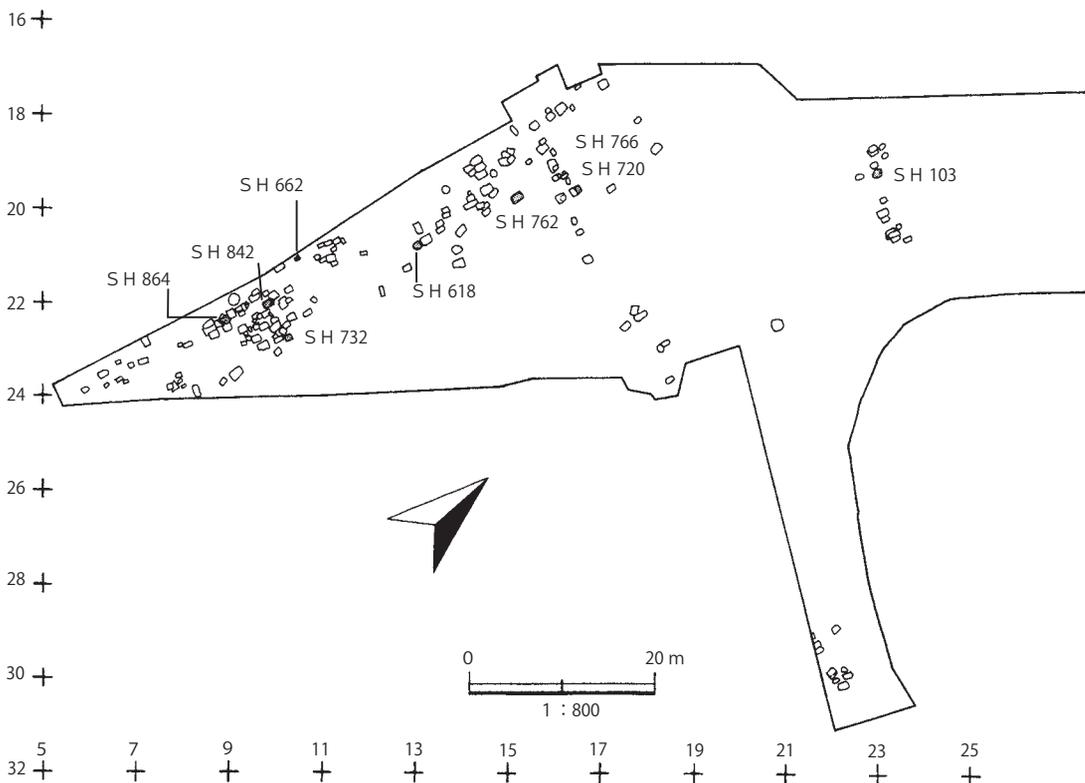
最後に本稿の執筆に際して、青木昭博氏、関根達人氏、高桑登・弘美両氏、青森県埋文(佐藤氏)、秋田県埋文(栗澤氏)、水沢市埋文(佐藤氏)からご教示を頂いた。深くお礼申し上げたい。

註

- 1) 報告書に掲載された位牌の中で「159」・「160」の漆と思われる付着物について理化学分析などを行った結果、それぞれ「鉄錆」・「墨」であることがわかった。ここに付記しておくたい。
- 2) 関根達人氏のご教示によれば、早桶の方が箱形より早くから使用されるということであった。今回の調査では、箱形の使用年代が早く行われる観があるが、墓域全体では、余り差のない状況であったと思う。
- 3) 畑内遺跡は、46基の墓が検出され、埋葬状況は土葬であった。墓坑形態は寝棺(長方形)、座棺(立方体)である。副葬品は大堀相馬焼、久慈コクジ焼、六道銭などである。胆沢城は、52基の墓が検出され、2基のみ掘り上げた。墓坑形態は寝棺、座棺、早桶で埋葬状況は土葬であった。柴内館は14基の墓が検出され、埋葬形態は土葬であった。副葬品は、六道銭、ハサミ、鏡、銅製鬘盤などである。

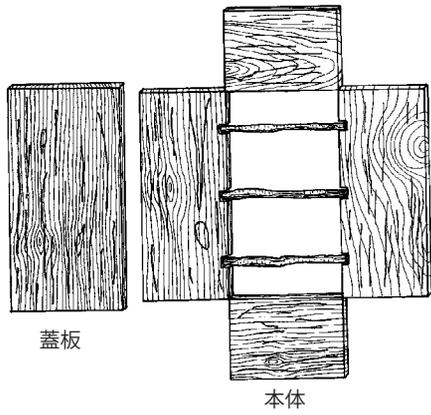
引用文献

押切智紀他 2002 『渋江遺跡第4次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第106集

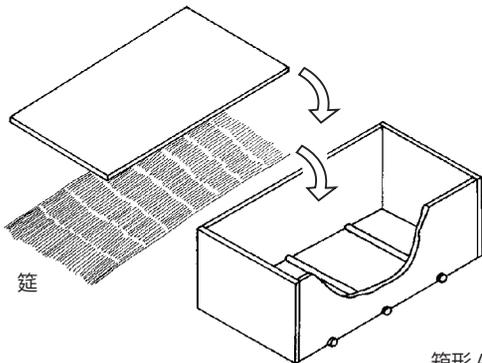
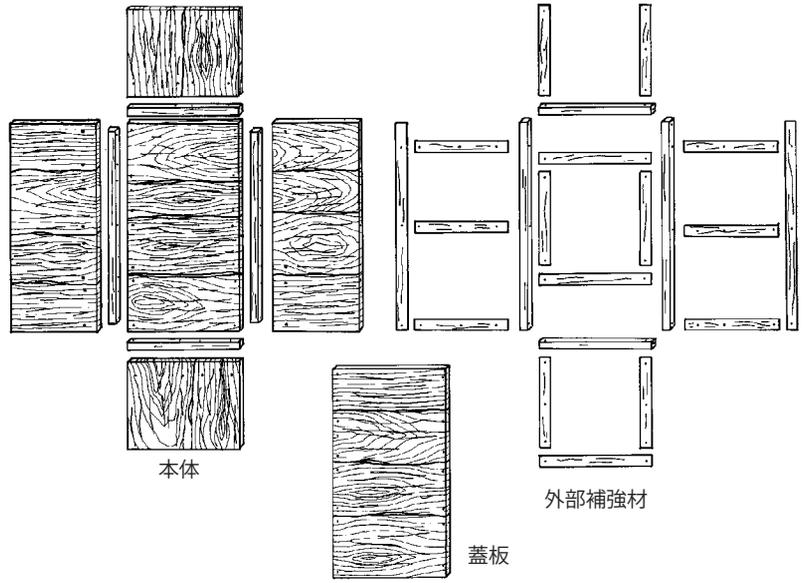


第1図 遺構配置図

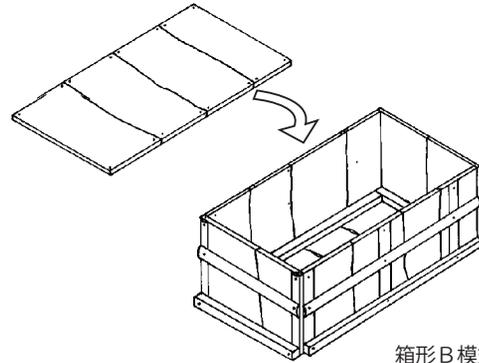
箱形A展開図



箱形B展開図

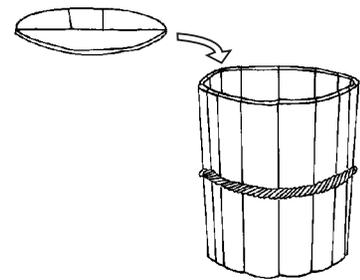
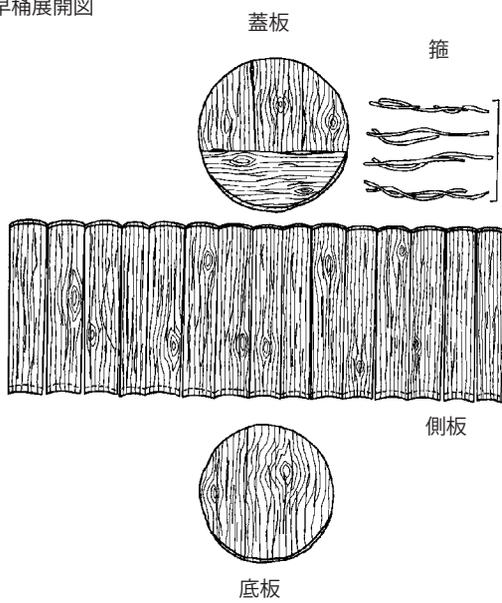


箱形A模式図



箱形B模式図

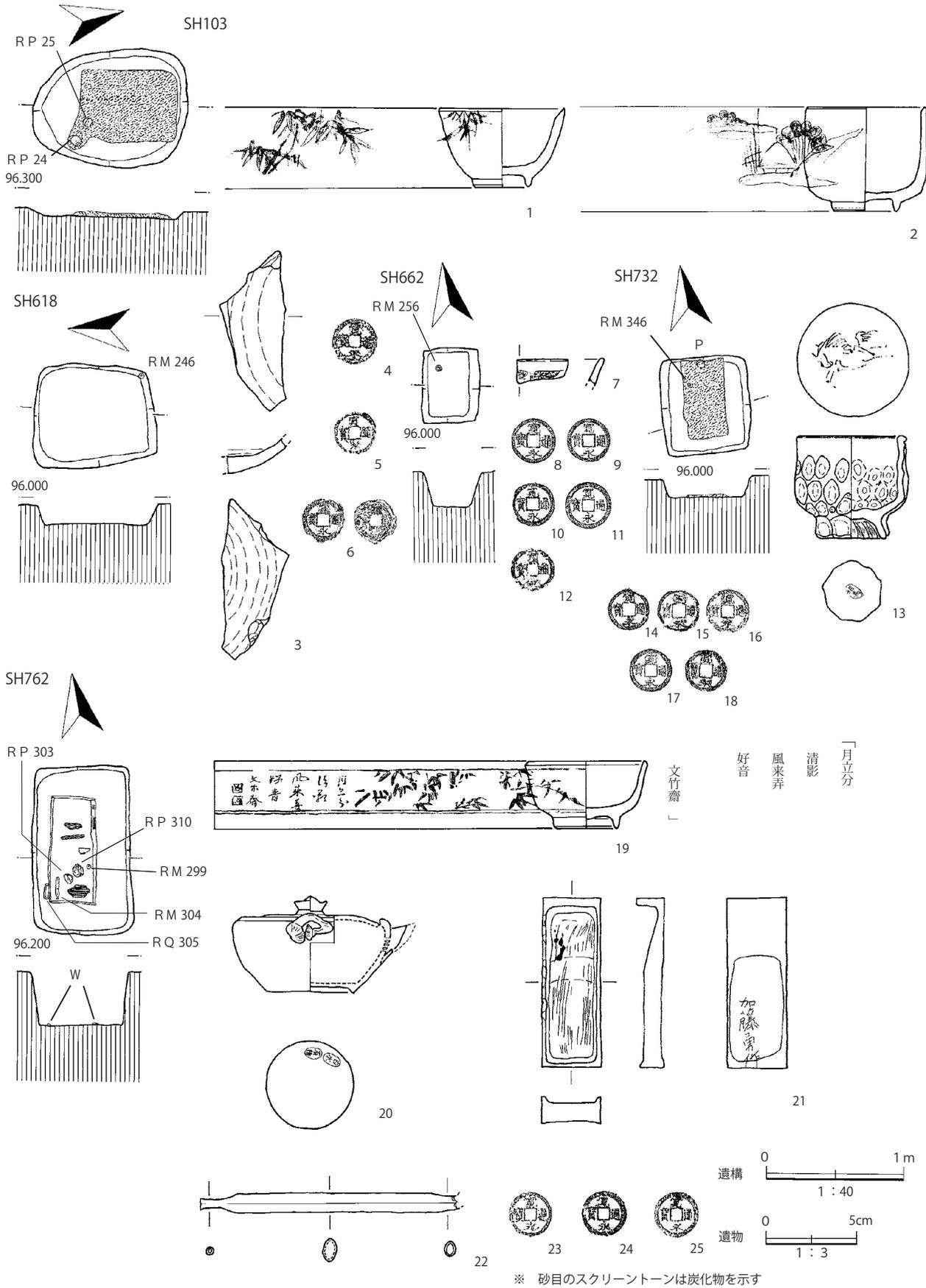
早桶展開図



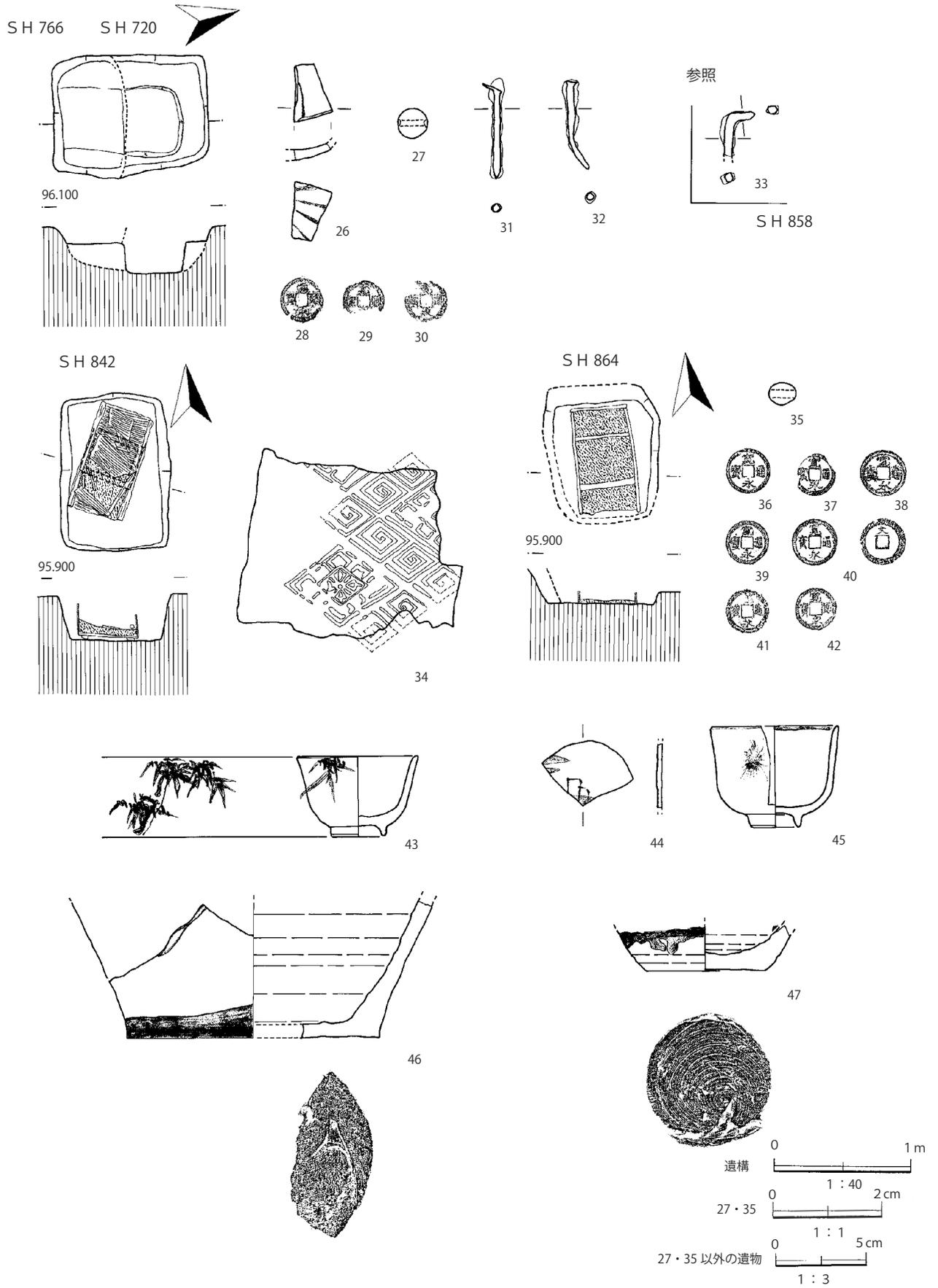
早桶模式図

※ 木棺のスケールは任意としている。
また、一部の不明箇所は推定で描いている。

第2図 木棺構造



第3図 近代墓(1)



第4図 近代墓(2)

表1 陶磁器観察表

挿図	番号	種別 器種	形状	計測値 (mm)				胎土色調 釉薬色調	胎土	残存	装飾 印 銘 文様など			出土地点 登録番号	製作地 製作年代
				口径	底径	器高	器厚				外面	内面	底部		
第3図	1	染付 小碗	端反形	68	32	42	4	灰白 5Y8/1 灰白 5GY8/1	緻密	完形	竹文 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH103 RP25	平清水 19世紀後半
	2	染付 小碗		66	35	55	3	灰白 7.5Y8/1 灰白 5Y8/1	緻密	完形	一屋山水・船 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH103 RP24	会津本郷 19世紀前半
	3	陶器 大碗		-	-	-	10	灰白 7.5Y7/1 灰白 5Y6/2	細砂混	体部	貫入あり 灰釉	灰釉	-	SH618	不明 近代
	7	染付 湯呑?		-	-	-	3	灰白 2.5GY8/1 灰白 2.5GY8/1	緻密	口縁部	文様あり 貫入透明釉	透明釉	-	SH662	不明 19世紀
	13	陶器 湯呑		59	38	55	2	淡黄 2.5Y8/3 灰白 7.5Y7/2	細砂混	完形	指押し痕 灰釉	見込水金走馬文 灰釉	高台内畳付露胎 「相馬」陰刻	SH732	大塚相馬 19世紀後半
	19	色絵 小碗		68	36	36	5	灰白 5Y8/1 灰白 5Y8/1	緻密	完形	竹文・漢詩 透明釉	透明釉	畳付露胎	SH762 RP303	平清水? 19世紀後半
	20	陶器 急須		82	45	51	3	灰 N4/0 -	緻密	9/10	蓋・身が癒着 赤錆付着 両側に茸装飾	-	「白水」・「有隣」陰刻	SH762 RP310	不明 近代
第4図	26	染付 碗?		-	-	-	4	灰白 N8/0 灰白 N8/0	緻密	体部	縦縞文 透明釉	圏線 透明釉	-	SH720	不明 19世紀
	43	染付 小碗	端反形	66	31	44	3	灰白 5Y8/1 灰白 5Y8/1	緻密	完形	竹文 透明釉	透明釉	畳付露胎	18-15G	平清水 19世紀後半
	44	染付 徳利		-	-	-	3	明緑灰 10GY8/1 灰白 N8/0	緻密	体部	帆掛け船 透明釉	露胎	-	20-11G	会津本郷? 近代
	45	染付 小碗		(70)	(28)	54	4	灰白 2.5Y8/1 灰白 2.5Y8/1	細砂混	1/5	栗? 透明釉	透明釉	畳付露胎	18-19G	会津本郷 19世紀後半
	46	陶器 甕		-	(138)	-	10	褐灰 10YR5/1 暗赤褐 5YR3/2	粗砂混	底部	鉄釉 (茶・黒)	鉄釉 (茶)	回転糸切り痕 鉄釉 (茶)	17-16G	在地系 近代
	47	陶器 小甕		-	68	-	8.5	にぶい橙 7.5YR7/4 暗紫灰 5RP4/1	細砂混	底部	鉄釉 (黒)	鉄釉 (黒) 一部付着	回転糸切り痕	20-11G	在地系 近代

※ 胎土・釉薬色調は 1999 年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。

表2 石製品・金属製品・ガラス製品観察表

挿図	番号	種別	器種	計測値 (mm・g)				破損	素材	調整その他	出土地点	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量					
第3図	21	石製品	硯	91	31.5	14	81.27	無	粘板岩	裏に「加藤勇作」陰刻 高嶋硯	SH762	RQ305
	22	金属製品	キセル	吸口 胴部	19 118	径 8.12 孔径 3 径 6	厚さ 1 厚さ 1	有	銅?	表面に銀メッキ	SH726	RM304
第4図	27	ガラス製品	数珠玉	直径 5	孔径 1.5		0.33	無	ガラス	白色 ほかに同様のものが3個ある	SH720	
	31	金属製品	頭巻	54	5~10		3.59	有	鉄	表面に錆が付着する 丸釘	SH720	
	32	金属製品	頭巻	54	3~8		4.93	有	鉄	表面に錆が付着する 丸釘	SH720	
	33	金属製品	折釘	33	6~8		2.26	有	鉄	表面に錆が付着する 角釘	SH858	
	35	ガラス製品	数珠玉	長径 5	短径 4	孔径 1.5	0.23	無	ガラス	透明 ほかに同様のものが49個ある やや径の大きい数珠玉も含む 2種類あるか	SH864	

表3 銭貨観察表

挿図	番号	出土 地点	登録 番号	銭 銘	分 類	鑄造地・名称	鑄造年代	計測値 (mm・g)				備 考	
								外径	穿径	厚さ	重量		
第3図	4	SH618	RM245	寛永通寶	古寛永	水戸銭	寛永 14 年 (1637)	24.3	5.3	1	3.1	錆付着	
	5	SH618	RM245	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄 13 年 (1700)	23	6	0.7	2.6	錆付着	
	6	SH618	RM246	寛永通寶	新寛永	大坂高津新地	寛保元年 (1741)	23.2	5	1	2.4	錆付着・背に「元」	
	8	SH662	RM256	寛永通寶	古寛永	駿河国香谷銭	寛永 14 年 (1637)	24	6	1	3.4	錆付着	
	9	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元禄 10 年 (1697)	23.2	6	1	3.2	錆付着	
	10	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	京都七条川原	元禄 13 年 (1700)	23.6	5.5	1	2.2	錆付着	
	11	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭 (広永)	宝永 5 年 (1708)	24.9	6	1	3.2	錆付着	
	12	SH662	RM256	寛永通寶	新寛永		元禄 10 年~ (1697~)	25	6	1.5	2.9	錆付着・一部欠損	
	14	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文 2 年 (1737)	21.8	6.5	0.4	2.2	錆付着・一部欠損	
	15	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	江戸亀戸村	元文 2 年 (1737)	22.4	6.7	0.7	1.8	錆付着	
	16	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文 2 年 (1737)	23	6	0.5	1.8	錆付着	
	17	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年 (1741)	22.6	6	0.6	2.8	錆付着	
	18	SH732	RM346	寛永通寶	新寛永	佐渡相川	寛保元年 (1741)	22.6	6.5	0.7	2.6	錆付着	
	23	SH762	RM299	寛永通寶	古寛永	駿河国井之宮銭	寛永 16 年 (1639)	24.7	6	1.8	3.7	錆付着	
	24	SH762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭 (広永)	宝永 5 年 (1708)	24.8	5.5	1.8	3.2	錆付着	
	25	SH762	RM299	寛永通寶	新寛永	四ツ宝銭 (広永)	宝永 5 年 (1708)	25	5.7	1.8	3.1	錆付着	
	第4図	28	SH720		寛永通寶	新寛永	出羽国秋田	元文 2 年 (1737)	23.5	6	0.8	2.1	錆付着
		29	SH720		寛永通寶	新寛永		元禄 10 年~ (1697~)	22.8	5.5	0.5	1	錆付着・残存率 2/3
		30	SH720		寛永通寶	新寛永		元禄 10 年~ (1697~)	22.8	5.8	0.8	1.5	錆付着・一部欠損
		36	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	24.5	5.6	1.5	2.2	錆付着
		37	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	22.9	6	2.6	2	錆付着・一部欠損
		38	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永	仙台銭	寛永 12 年 (1637)	23.9	6.3	1.7	2.5	錆付着
		39	SH864	RM380	寛永通寶	古寛永		寛永 3 年 (1626)~寛文 8 年 (1668)	23.2	5.7	2.3	1.5	錆付着
		40	SH864	RM380	寛永通寶	文 銭	正字文	寛文 8 年 (1668)~天和 3 年 (1683)	25.2	5.9	1.5	2.5	錆付着
		41	SH864	RM388	寛永通寶	古寛永	京都建仁寺銭	承応 2 年 (1653)	23.5	6.8	1.4	2.6	錆付着
42		SH864	RM388	寛永通寶	新寛永	下野国久次良村	元文 2 年 (1737)	23.7	6.1	1.4	2.1	錆付着	

※古銭の鑄造地・名称・鑄造年代の判別は、
小川浩編『日本の古銭』(人物往来社) 日本貨幣商協同組合『日本貨幣カタログ』を参照した。
武田健市 1998『大日北遺跡』(多賀城市教育委員会)
また、墓坑内で出土した銭貨の内、数枚癒着したものについてはこの表や挿図で示していない。



D区南側完掘 (北から)



S H 618 (北から)



S H 622 (東から)



S H 762 (北から)



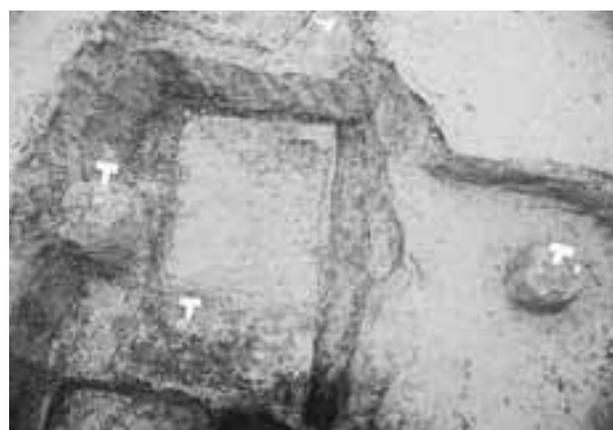
R P 310 (東から)



S H 842 展開 (南から)



S H 842 布出土状況 (南から)



S H 864 (南から)